要約 世界文学全集 II

木原武一

新潮選書

この本の最大の特色は、すべての名作がみんな同じ長さにそろえられていることです。原作を読むのに数十時間もかかる長編小説も、ここでは所要時間約15分。この短時間に、名作のエッセンスが、スリルと感動で味つけされて、おさめられています。けっしてあなたを退屈させないことだけは保証します。どうぞ、この文学百パーセントの濃縮ジュースをご賞味され、明日への知力と活力にしてくだされば幸いです。

著者

要約 世界文学全集 II〈新潮選書〉

© Buichi Kihara 1992, Printed in Japan

一九九二年五月二五日 発行
一九九二年六月三〇日 二刷

著者 木原武一
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話 営業部(03)三二六六—五一一一
編集部(03)三二六六—五四一一
振替 東京四—八〇八番

印刷 三晃印刷株式会社
製本 株式会社植木製本所

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

ISBN 4-10-600422-4 C0390

価格はカバーに表示してあります。

学全集 II

木原武一

新潮選書

要約　世界文学全集Ⅱ　＊　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ドストエフスキー『悪霊』〔一八七二〕 11
トルストイ『戦争と平和』〔一八六九〕 22
ツルゲーネフ『父と子』〔一八六二〕 33
ドストエフスキー『死の家の記録』〔一八六二〕 44
フローベール『ボヴァリー夫人』〔一八五六〕 54
ソロー『森の生活』〔一八五四〕 65
シュティフター『水晶』〔一八五三〕 75
バルザック『ゴリオ爺さん』〔一八三五〕 86
ホーソーン『緋文字』〔一八五〇〕 97
ブロンテ『嵐が丘』〔一八四七〕 108
メリメ『カルメン』〔一八四五〕 119

ゴーゴリ『死せる魂』〔一八四二〕 130
レールモントフ『現代の英雄』〔一八四〇〕 141
E・アラン・ポー『ウィリアム・ウィルソン』〔一八三九〕 153
バルザック『谷間の百合』〔一八三六〕 163
プーシキン『スペードの女王』〔一八三四〕 173
ゲーテ『ファウスト』〔一八三一〕 184
スタンダール『赤と黒』〔一八三〇〕 195
コンスタン『アドルフ』〔一八一六〕 206
シャミッソー『影をなくした男』〔一八一四〕 217
フランクリン『自伝』〔一七八九〕 228
ルソー『告白』〔一七八九〕 238

ゲーテ『若きウェルテルの悩み』〔一七七四〕 249
アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』〔一七三一〕 261
スウィフト『ガリヴァー旅行記』〔一七二六〕 272
デフォー『ロビンソン・クルーソー』〔一七一九〕 282
シェイクスピア『マクベス』〔一六〇六〕 292
セルバンテス『ドン・キホーテ』〔一六〇五〕 303
モンテーニュ『エセー』〔一五八八〕 314
トマス・モア『ユートピア』〔一五一六〕 325
ホメーロス『オデュッセイア』〔BC八〇〇頃〕 336
あとがき 347

（〔　〕内は、作品が出版された年を示し、年代の新しい順に並べてある。ただし、カフカ、フランクリン、シェイクスピア、ホメーロスは執筆された年。）

〔第I巻　目次〕

ナボコフ『ロリータ』〔一九五五〕
ヘミングウェイ『老人と海』〔一九五二〕
カポーティ『遠い声 遠い部屋』〔一九四八〕
カミュ『ペスト』〔一九四七〕
マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』〔一九四〇〕
サン＝テグジュペリ『人間の大地』〔一九三九〕
ヘンリー・ミラー『北回帰線』〔一九三四〕
フォークナー『八月の光』〔一九三二〕
ツヴァイク『ジョゼフ・フーシェ』〔一九二九〕
D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』〔一九二八〕
プルースト『失われた時を求めて』〔一九二七〕
モーリヤック『テレーズ・デスケイルゥ』〔一九二七〕
アンドレ・ジッド『贋金つかい』〔一九二六〕
フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』〔一九二五〕
トーマス・マン『魔の山』〔一九二四〕
ラディゲ『肉体の悪魔』〔一九二三〕
サマセット・モーム『月と六ペンス』〔一九一九〕
カフカ『審判』〔一九一四〕
アナトール・フランス『神々は渇く』〔一九一二〕
O・ヘンリー『O・ヘンリー短編集』〔一九一一〕
リルケ『マルテの手記』〔一九一〇〕
ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』〔一九〇六〕
ギッシング『ヘンリ・ライクロフトの私記』〔一九〇三〕
ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』〔一八九一〕
トルストイ『クロイツェル・ソナタ』〔一八九〇〕
チェーホフ『退屈な話』〔一八八九〕
スティーヴンソン『ジーキル博士とハイド氏』〔一八八六〕
マーク・トウェイン『ハックルベリイ・フィンの冒険』〔一八八四〕
モーパッサン『女の一生』〔一八八三〕
ゾラ『ナナ』〔一八八〇〕
トルストイ『アンナ・カレーニナ』〔一八七八〕

要約 世界文学全集 II

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ドストエフスキー
悪霊

【作家と作品】

ロシアの作家ドストエフスキー（一八二一―八一）の小説には何かものに憑かれたような人物がしばしば登場するが、そういう人物が一堂に会したのが『悪霊』（一八七二）である。このタイトルは、悪霊に憑かれた豚の群れが湖にとびこんで溺れ死ぬという聖書の記述からきているが、作者は無神論と革命思想をその「悪霊」に見たて、五人の主要登場人物にたいして、二人に自殺、他は殺害、病死、国外逃亡という結末を用意する。しかし、彼らが何にとり憑かれていたのかはそれほど単純には言えないようだ。ドストエフスキーのほかの長編小説と同様、『悪霊』も話がたいへん錯綜しているが、彼が描こうとしたのはストーリーの面白さよりも各登場人物の強烈な個性のほうである。

ステパン・ヴェルホーヴェンスキーは二度の結婚歴のある、もと大学教授で、五十をすぎた現在、たいへんな資産家のワルワーラ夫人の大邸宅に寄食する身であった。カルタ賭博にはまるで目のないほうで、そのことでしばしばワルワーラ夫人といざこざをおこしていた。「ぼくはわがままな子供だ、子供のエゴイズムはそっくりもちあわせているくせに無邪気なところだけはない子供だ」と言っているが、かつては革新的な思想家あるいは詩人として若者にたいへん人気があった。

ワルワーラ夫人の一人息子ニコライ・スタヴローギンは、彼の教え子で、学業を終えると近衛騎兵連隊に配属されたが、決闘沙汰をおこして投獄されたこともあり、最近、三年間の外国暮しを終えてロシアに帰ってきたところだった。

イワン・シャートフもステパン氏の教え子で、学生騒動がもとで大学を放校になったことがあり、「シャートフ君と議論するときにはまず縛りつけておかねばならない」とステパン氏が冗談に言うほど、彼は自分の信条にかかわることが話題になると病的に興奮した。彼は、ある力強い思想に打たれると、たちまちその思想に圧倒されて、場合によっては永遠にその影響から抜け出せなくなるといったたぐいの純粋なロシア人の一人だった。こういう連中は、思想を自分なりに消化するということがけっしてできず、ただやみくもにそれを信じこんでしまうので、その後の全人生は、大きな石の下敷きになって息も絶えだえにあがき続けるといったあわれなものになってしまうのである。彼はスタヴローギンと建築技師のキリーロフ、それにステパン氏の息子ピョートルとともにスイスで革命組織に加わり、キリーロフといっしょに、「アメリカの労働者の生活をみずから経験し、その個人体験によってもっとも困難な状況に置かれた人間の状態を検証す

る」という目的でアメリカに渡ったことがあった。ふたりはある開拓農場で働くことにしたものの、きびしい労働に耐えられず、ほうほうの体で故国に逃げ帰ってきたが、無一文になったふたりに旅費を送ったのがスタヴローギンだった。ピョートルもスイスから帰り、かつての仲間たちは故国の町で再会することになった――。

キリーロフ

「きみはたいへん幸福らしいね」

「ええ、たいへん幸福です」ごくあたりまえの返事をするようにキリーロフは答えた。

「でもこの前はひどく悲しんでいたね」

「あのときはまだ自分が幸福なことを知らなかったんです。きみは葉を見たことがありますか、木の葉を?」

「ありますよ」

「ぼくは、この間、黄色い葉を見ましたよ。風で舞ってきたんです。ぼくは十歳のころ、冬、わざと目をつぶって、木の葉を想像してみたものです。葉脈がくっきり浮き出て、太陽にきらきら輝いている緑色の葉です。それがあまりにすばらしいので、目をあけては、すぐにまた目を閉じたものだった」

「なんのことです、たとえ話ですか?」

「いいや、たとえ話なんかじゃない。ただの木の葉、一枚の木の葉ですよ。木の葉はすばらしい。すべてがすばらしい」

「すべて?」

「すべてです。人間が不幸なのは、自分が幸福であることを知らないから、それだけです。これ

がいっさい、いっさいなんです！　それを知るものはただちに幸福になる」
「きみは、自分がそんなに幸福だということをいつ知ったのかね」
「先週の火曜日、いや水曜日です。もう深夜をすぎて水曜日になっていた」
「どんなきっかけで？」
「覚えていません、自然とです。部屋のなかを歩いていて……ぼくは時計を止めましたよ、二時三十七分でした。人間がよくないのは、自分たちがいい人間であることを知らないからです。人間は自分がいい人間であることを知る必要がある。そうすればすべての人が、一人残らず、即座にいい人間になる」

スタヴローギン

「わざわざこんな時間を選んで、きみに警告しに来なければならなくなったんだが、きみはもしかすると殺されますよ」とスタヴローギンは相手の顔をのぞきこみながら切り出した。
「ぼくが危険にさらされているかもしれないことは知っています。でも、それをどうしてあなたが知っているんです」とシャートフは無表情な調子で言った。
「それはぼくがきみと同様、あの連中の仲間だからですよ」
「ぼくはやつらなんぞこわくない！」とシャートフはテーブルを叩いて荒々しく叫んだ。「やつらとはもう手を切ったんです。ほんとのところ、あなたは何を知っているんです？」
「ぼくが何を知っているか試験しようというのかね？　ぼくが知っているのは、きみが二年前、外国でこの会にはいったこと、そして、きみはキリーロフといっしょにアメリカへ渡って思想を変え、スイスへ帰るとすぐ会を脱退しようとしたこと、そして、連中はきみにロシアに帰ってある人物から印刷機を受取り、それをある人物に引渡すまでのあいだ、それを保管するように命じ

たこと、そんなところかな。あの連中はきみと手を切ろうなんて少しも思っていないのだ」
「そいつはナンセンスだ。ぼくはすべての点で彼らと意見を異にすると、率直に言明したんですからね」
「きみはつねに監視を受けていたんです。それで、ピョートル・ヴェルホーヴェンスキーが今度ここへ来たのは、きみの件にすっぱりけりをつけるためなんです。密告する恐れのある人物として、しかるべき時にきみを消してしまおうというわけです」

ピョートル

「その会合にはどんな連中が来るんです?」
「いやもう、雑多な連中ですよ」とピョートルは言った。「連中には何が効果的だと思いますか? まず、肩書きですよ。秘書あり、秘密監視官あり、会計官あり、議長あり、書記あり、その代理ありというわけで、これはえらくお気に召した。つぎに強力なのはセンチメンタリズム。なにしろロシアに社会主義が広まったのは主としてセンチメンタリズムのせいですからね。はっきり言っておきますが、あの連中なら火の中にでも飛びこませてみせますよ。おまえはまだリベラルの度合が足りんぞと、ひとつどなりつけてやりさえすればいい。たしかに、官僚制とかセンチメンタリズムとかは組織をかためる立派な糊(のり)にはちがいないけれど、もっといいものがある。サークルの四人のメンバーをそそのかして、あとの一人のメンバーを密告の恐れがあるとかなんとか言って、殺させる。そうすればきみはたちまち、その流された血によってメンバーを固く結束させられる。彼らはきみの奴隷になることまちがいなしというわけだ、ははは」
「スタヴローギン、きみは美男子ですよ!」ピョートルは陶酔したように叫んだ。「きみのいち

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com